
そのオトコ 要注意っ！（オフィスでニアミス）

和 貴

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのオトコ 要注意っ！（オフィスでニアミス）

【Nコード】

N8126M

【作者名】

和 貴

【あらすじ】

白石恵理は親友の琴美とランチを摂っていた。いつもならもう一人居るのだが、彼女は来月寿退社で、恵理達の憧れている『花嫁』になる。

琴美からは抜け駆けしないでねと釘を刺されてしまうけれど、恵理には既に一緒に暮らしている同居人が居た。

『その女 危険人物！！』ヒロイン恵理からの視点です。

第1話（前書き）

これは某公募サイト応募作品ではありませんが、同じシリーズ物です。

全11話。ヨロシクです。

第1話

> i 1 0 3 3 5 | 3 1 6 <

「ねえ、恵理は真由の結婚式に何着て行くの？」

「え？」

「親友の晴れの日の受付を仰せつかったのだもの。ここはキアイ入
れて行くしかないでしょ？」

澄み切った青空に、木漏れ日の光がきつく陰影を落とし始めた初
夏のお昼休み。

本日のお勧めランチを摂ろうと、社員食堂でトレーを手にして清
算^ジの順番待ちをしていた私（恵理）は、一緒に並んで居た同期の琴
美から話題を振られた。

「そうねえ、何着て行くのかな？ ……水色のワンピースはこの前雛子
の時に着ちゃったし、グレーのパンツスーツは茉莉の時に着ちゃっ
たし……」

「紺に白い縁取りがしてあったディオールワンピースは？」

「ああ、あれ？ あれは先週の飲み会の時に卸しちゃったわ」

琴美が覚えていたワンピースは私のお気に入りだったけれど、特別な

時にそればかりを着て行く訳にはいかないもの。

「黒のスーツは？ シャネルの」

「……………」

私は返事が出来なくて、押し黙ってしまった。確かにあれはお気に入りのスーツだったのだけれど…………

「どうしたの？」

「あ、合わなくなっちゃった……………」

「ウエストが？」

「うん……………」

ああ、もうバレちゃったから良いわよね？ 私は琴美にえへへと笑ってごまかした。

「え、そう言えば恵理って最近標準に近付いて来た？」

「……………物は言い様だね……………良いわよ。『太った？』ってズバリと聞いてくれても」

「そこまでは思ってないわよ？ だって、恵理は元々痩せ過ぎだったから。それでもまだ標準よりも細かいじゃない？」

「喜んでいいのか、悲しんでいいのか悩む言い方だね。それ」

私は琴美からさりげなく顔を背けると、私は頬が熱くなるのを感じてしまった。だって、司が作ってくれるご飯が美味しくて、つつい食べ過ぎてしまっただもの……

「せっかくだから、この際、新調するわ」

「そうねー。はあ、この時期みいくん同期が片っ端から居なくなっちゃっわよねえー。『ジューン・ブライド』だなんて言葉に煽られちゃってさ。あんなの業界の企みじゃない。大体、梅雨時の日本には似合わないって事、判らないのかしらね？ 沙希だって真由だって……半年前まではカレシ居ない歴を私達と一緒に競って更新していたのにいー。裏切りモ〜ン」

羨望と嫉妬が入り乱れた琴美が、拗ねて口を尖らせる。でも、琴美の気持ち痛みほど判るわ。私だって琴美と同感なんだもの。

「出ていく方も半端じゃないわよ。お慶び事なんだから、文句は言えないんだけどねー」

私も溜息混じりに溢してしまった。

そりゃあ、先月だけで結婚式と出産のお祝い事が三件続いた直後の、親友の結婚式なんだもの。

『出費』と言う物理的な問題はもちろんだけれど、それよりも『先を越された』って言う精神的ダメージの方が私達にとっては大きいわ。真由がとても羨ましい。

第2話

いつもは真由と琴美の三人でのランチなのだけれど、今日は来月末に式を挙げる真由が式場の打ち合わせを何とかでお休みしていた。

社内のフロントで総合受付案内を遣っていた真由は、この春にクレーム処理で遣って来た業者の彼氏と運命的な出逢いを果たし、来月にはめでたく結婚。寿退社をすることになっている。

知り合ってたった数カ月後の電撃結婚に、外野からはあれこれと聞くに堪えない噂まで取り沙汰されていたけれど、私と琴美は真由の事を『ふしだらな女』だなんて噂されているような娘じゃないって知っているし、お相手の彼だって、会ったのは一度だけだったけれども、とても誠実そうな好印象の彼だったもの。

やっぱ『運命の赤い糸』は存在しているのね。

「ホント、運命って判らないものよねー。でも、恵理は私を裏切ったりしないですよ?」

「え?」

琴美の力強いダメ出しに、私の心は大きく揺れた。だって琴美には悪いけど……私、もう彼氏候補が居るんだもの……

彼氏だと断言出来ないのには少しばかりワケがある。

彼は私の部下であり、一緒に生活している同居人。

もつとも、彼が私の事をどう想ってくれているのかは物凄く疑問だし、女性の噂が常時絶えない彼にしてみれば、私の事なんか『都合の良い同居人』くらいにしか思っていないのかも知れない。

彼は、私の父が経営している会社に、今年採用された新卒社員。

いつも遅刻寸前に滑り込んでいる私と競い、三カ月前に勝手に事故って病院送りになった、自称『元走り屋』オトコ。

事故つたと言っても、厳密に言えば私の無茶な運転が本当の原因だったのは判っている。私のフィットにぶつかりそうになって、彼は一旦変更した車線を戻したせいで後続車に突っ込まれ、勢いで反対車線へと押し遣られて、対向車と衝突して大怪我を負ってしまった。

それまではお互い素性も知らない間柄だったのに、入社時によく出くわしてはその度にカーチェイス紛いなコトをしていたせいで、既に険悪な雰囲気が出来上がっていた。

だから、彼が事故に遭おうと大して気にもならなかった。寧ろ、迷惑なドライバーが一人減ったわ……くらいにしか、私は考えてやしなかったんだもの。

ところが、私の父は何故だか事故の事を知っていて、入社した私を捕まえるなり、一緒にお見舞いに行くと言い出した。その時はど

うして父がそんな事を言い出したのか判らなかつたけれど、まさかあのタチの悪いドライバーが父の会社の新卒社員だったなんて。

事故直後のお見舞いに行った私に向かって、生意気にも上から目線のタメグチで私をこの上なく不愉快にさせてくれた不良オトコは、安全装備さえまともに機能出来なくらい車を違法に弄っていたせいで、今どきの事故にしては珍しく重症だったみたい。でも、勝手に装備を取り外していた本人が悪いのであって、大怪我をしたのは私の責任じゃないもの。

それに保険に加入していなかったらしく、入院治療や事故後の補償はおろか、生活費さえ捻出出来なくなつて友人宅をあちこち転々と放浪する破目になった。

けれど、それでも怪我や事故の補償一切を、一緒に住んでいる今だって、私に向かって口にすることは無い。

一体、どういう心算なのか気になつたけれど……私は敢えてその事を本人から訊き出そうとは思わない。と言うのも……正直言うと、最初彼とは余り関わりたくはなかつたから。

だって、私に対しては一応『上司』だからなのか、それほど気にはならないけれど、友達と一緒に居る時の彼は、口も悪ければガラも悪くてどこから見たつて立派な不良なんだもの。

もつとも私には総会屋……平たく言えばヤクザの親戚が居るから、ガラの悪さにはある程度の免疫がある。けれど……だからと言って、こちらから好んでお付き合ひしたいだなんて思わないわ。

なのに……まさかその彼が私の部署に配属されて来るだなんて……

…本当に想いも寄らなかつた事なんだもの。

彼は第一印象とは少しばかり違っていた。

『走り屋』だなんて偉そうに……路上を我者顔で走る迷惑極まりない暴走族じゃないの……と思っていたら、意外にも普段は公道マナーを守っているし、追い越しをする時は相手を驚かさないうような車間距離と余裕を持ち、注意を払って追い越している。

一般のドライバーなら信号が黄色になればアクセルを踏み込む人が多い中、敢えて彼は停車するし、渋滞になつても横道があれば車間を取り、道を車体で塞いで横道からのドライバーの迷惑になるような事もしない。却つて他のドライバーよりも気を配り、優しい所があるように思えた。遅刻ギリギリで私と先を争っていたのは、別人だったのじゃないかしらと思えるくらいに。

そんな彼が私と同居するようになったのは、配属された私の部署に遣つて来て数週間後の事だった。彼は相変わらずの生活苦に悩まされていたみたいだったけれど、まさか本当に倒れてしまふとは思わなかつたわ。

第3話

他部署に提出する設計図面の計算式で、間違っている箇所を見付けたから呼び出してミスを指摘した。

上司である私が勝手に訂正しても、何ら問題は無い些細なミスだけれど、この先彼を業務で成長させて行く過程では『気付かせて、以後の業務に反映出来る対策を立てさせる』事も必要だった。だから、簡単なミスであっても、指摘指導はすべきだと私は考え、敢えて彼を呼び出した。

ところが、その遣り取りが気に入らなかつたらしく、加えて長い間の空腹に苛まれてイライラしていた彼は、遂に怒りを爆発させて強い貧血を起こしてしまった。

流石に目の前で倒れられたら、誰だって慌てるわよ。

私は彼の身の上に降りかかった『災難の後遺症』を見過ごす事が出来なくて……身を寄せる所も無くなっていた本人の了解を得ずに自宅に『お持ち帰り』をしてしまい、以後彼とはなんとなくの関係が続けている。

「恵理の好みのタイプはどんな人？ やっぱ総務部長の伊達さんかしら？」

琴美から『伊達』の名前を口にされてしまい、私は飛び上がりそうになるくらい驚いて、嫌な汗を掻いてしまった。

だって、みんなには内緒にしているけれど、彼は祖父　木村工業会長が勝手に決めた私の婚約者なんだもの。

彼は私よりも四つ年上で、父が経営しているこの木村工業の子会社である『伊達ケミカル』の一人息子。

木村工業へ子会社となる以前の旧社名は『伊達製薬』。創業が明治からと言う老舗で、医薬品を取り扱っていた業界国内最大手の製薬会社だった。

成長し続けていた伊達製薬は、今で言う『コンプライアンス』内部告発から企業倫理を指摘され、マスコミにその営業手腕を暴かれて失墜した。今はかなり規模を縮小して、木村グループの傘下に入り『伊達ケミカル』と社名変更を余儀なくされてしまったけれど、元は木村よりも由緒ある一流企業だった会社で、伊達はその会社の御曹司。

彼は関東にある某有名経済大学を首席で卒業。文武両道に秀でた優秀な彼を、当時社長だったお爺様が見逃す筈は無く……伊達ケミカル次期社長としてその椅子が用意されていたにも関わらず、親会社である木村工業へ半ば強制的に雇用されてしまったのだそう。

彼を跡取りとして考えていた伊達家からしてみれば、彼は木村家へ人身御供か人質として差し出されたも同然だと誤解を招かれてしまうような処遇だったらしい。

自分の親の会社存続条件を楯にされて仕方無く、彼は入社後の三

年間、経理部と人事部を一通り務めた後、その若さで異例の出世を果たし、現在の総務部長に就任している。

私が高校生の頃から、伊達は私の事を婚約者だと知っていたらしくて、特別な存在として大切に扱ってくれていた。

大切に想ってくれるのは嬉しいけれど、私はどうしても仲の良い幼馴染の位置から抜け出せないでいるし、彼の事をどうしても『婚約者』だとは認められないでいる。

私と彼とでは、趣味も違えば性格も多分……『合わない』と思う。長い時間を二人きりで居た事も無ければ、きつい言葉を投げ付けられたわけでも、口論をして争ったわけでも無い。むしろ、忙しい彼が逢えないのを心苦しく思っているのか、度々高価なプレゼント贈って来て、私を驚かせてくれるのだけれど……

彼の本当の狙いは、私の中に流れている『木村の血筋』であって『私』じゃない。

悲しいけれど、それを痛感したのは去年の設計部と総務部との合同飲み会での席だった。

小さかった頃から、他人に『大企業の令嬢』と意識されるのが嫌だった私は『ごく普通の女』として気取る事無く振舞い、必要以上に見栄を張るような事はしなかった。社員のみんなからは快く思われていたようだけれど、彼はそんな私が気に入らなかつたみたいだった。

『木村家のお嬢様が……』

自宅のマンションに送って貰った時に、軽く酔っていた彼の口から自然とその言葉が漏れたのを、私は聞き逃さなかった。

彼はその酒宴の席で、私との事を社員のみんなに公表しようとしていたらしい。むしろその為に仕組まれた、直接関わりの無い部署同士の酒宴の席であったのに、彼は自分の思惑に気付かず他の女性社員とはしゃぐ私を見て、公表を思い留めてしまったのだ。

あの時の伊達の悔しそうな表情が、私は未だに忘れられないで居る。

でも、私だつて同じだった。この先彼と一緒になつたとしても、彼の為に『壁の花』としておとなしく人形のように過ごすだなんてまっぴらだわ。いつその事、私に幻滅した彼が婚約を破棄してくれれば……とさえ願った。

なのに伊達は一向に私への態度を変えたりはしなかった。それどころか、その年齢では不可能だろうとされていた一級の上級管理職試験を受けて、合格すれば私との結婚をと望んで挑み、彼は宣言通りにストレートで合格したのだ。

前代未聞である最年少の上級管理職者の誕生に、当時の上役達は驚きを隠せなかったそうだ。尤も、これには更に凄い秘話があつて、管理職試験を受けた伊達と同じ日に、彼よりも四歳年下で、同じ一級管理職試験を受けて合格しているもう一人の人物が居た。

彼の名は『藤代水守』。

彼は私の身内で、この木村工業を陰で支える総会屋『成和会』幹

部であり、私をずっと見守ってくれている大切な幼馴染。

第4話

彼は私と伊達との縁談を嫌い、破談にするようにとお爺様に直接掛け合ってくれた、私の心強い味方なの。

『水守りん』が試験を受けて合格すれば、伊達との縁談は初めから無かった事に成る筈だったのに……

結局は子会社である伊達家の面目を慮り、加えて木村の正規社員では無い水守りんの試験合格の事実は、木村家によつて身内縁者の戯言として事実の一切を握り潰され、結婚の全面白紙撤回には至らなかった。

けれど、藤代家も木村を護り支えている大切な位置を占めている為に、水守りんの功績を無下には出来なかった。

私の背景に、『成和会』幹部の水守りんの存在が浮上して来た事で、伊達は『成和会』を意識しているせいか、迂闊に近寄れなくなつてしまい、以後、私と伊達は友達以上恋人未満と言う微妙な位置に留まつている。

「え？ え……ええ、そつ、そうね？ 女性社員人気ナンバーワンですものね。でも、彼は独り息子の御曹司だからその、あの、わ、私には勿体無くつてとても……」

「なあ〜に言ってるのよー。幾ら老舗製薬メーカーの御曹司だとか言つたつて、所詮は木村の子会社の息子でしょ？ 恵理こそ本社（じふし）の

お嬢様じゃないの。伊達さんからしてみれば、恵理こそ勿体無い好条件でしょ?」

はあ……この私が『勿体無い』……ですって?

人の『格』から言えば、私よりも伊達の方こそ遥かに上だわ。でも、彼が一流の人であるからこそ、私は彼に合わせようとして無理に背伸びをしてしまう。

生粋のお坊ちゃまである伊達は、プライドが高くてイミテーションを嫌う本物嗜好。

私は彼ほど本物には拘らないし、イミテーションであってもそれなりに素敵なものは沢山あるものだと思っている。微妙に価値観が違うから、洗練された彼の会話に付いて合わせているのがやっとだし、一緒に居ても常に気が張ってしまうから、ちっとも安らげやしない。

逢えば自分のペースを乱してしまい、気疲れて自分が辛くなってしまうような人を、私は選ぶ心算は無いもの。

「自分だってそうでしょ?」

琴美だって木村の取引先会社の社長令嬢。もっと自信を持っても良くってよ?

私は琴美にそう言ったけれど、なんだかお互いに謙遜し合っている会話が嵌り、どちらからともなくクスクスと笑ってしまった。

「はあ……男って見る目が無さ過ぎだわよ。こんな美人達を放っておくんだもの」

「美人過ぎても高嶺の花。逆に声を掛け難いのですって」

私は彼が言っていた言葉を引き合いに出した。

「お高くとまっているとでも思われちゃうのかしら？ でも、私はそんな事ないのだけどなあー」

「ああ、そう言えば、先週末に県内で初めてミカワでラリーがあったのでしよう？ 琴美、行くなって言わなかった？」

伊達の事で延々と話題にされるのも困ってしまうから、私はこの話を打ち切ろうと、琴美が興味を持っているモータースポーツへと話を振った。

琴美の両親は電子制御回路関連を取り扱っている会社で、地元モータースポーツ協会にスポンサーとして積極的に参加しているだけでなく、自分達のレーシングチームも持っている。

電子回路は別名『サーキット』とも呼ばれていて、モータースポーツが趣味だった琴美の父親の洒落で始まった道楽が、いつの間にか琴美達家族や社員を巻き込んでしまい、最近では電子回路の販売とどちらが趣味でどちらが仕事なのか曖昧になっているほどの熱の入れようなのだそう。

その為か、琴美本人もレースにかなり興味があり、レース観戦は勿論だけど、何度かスカウトに立ち会った事もある。

「もちろん行ったわよ。でもね、レースも凄かったんだけど、終わった後から始まったレースも凄かったわよー」

「なにそれ？ 打ち上げイベントか何か？」

「違うわ。県外からの招待客が引き揚げた後に、片付けでそのまま居残っていたらね、地元の走り屋連中が同じコースでバトル始めちゃったのよ」

「…………へ、へえ〜」

私は思わず顔が引き攣って、浮ついた相槌を打ってしまった。

レースに『バトル』って…………なに？

不思議に思っていたら、私の表情を読み取ってくれたのか、琴美が追加補足をしてくれた。

「ルールが在つてのレースでしょ？ その点、地元の走り屋は違うわ。なんでもアリなんだもの。眼の前でトップ争いの連中が、お互いに相手をコースアウトさせようとして競り合いになってね、クラッシュする瞬間を見ちゃってさあー、一台がライトを壊しちゃったのにまだ走っているの。滅多にあんなバトル見れないものね。もう興奮しちゃったわあ」

そこまで言うと、琴美はその時のシーンを思い出したのか、うつとりとした表情で視線を遠くへ泳がせる。

「凄い迫力だったんだからあ。夜間の山道でのバトルよ？ ただで

さえ街灯も無い夜の山道での走行中にライトが壊れちゃったのよ？
左右切れちゃっていたから、きつとヒューズが飛んだのね。普通
ならそこで諦めるトコロじゃない？ それなのにまだ続けていたの
よ。あれって、『ブラインドアタック』って言って、危険走行なん
だからあ

第4話（後書き）

ブラインドアタック : 夜間ヘッドライトOFF状態での走行。

第5話

「ね、その二台、どんな車だった？」

「んーと、片方は黒いランエボでね、もう片方は白い……旧式のインテグラだったかなあ。ランエボはスポンサーステッカーべた貼りだったお陰で簡単に身元が割れたんだけど、インテグラの方は全く貼って無かったのよ。でね、一緒に居たお父さんが、インテグラのドライバーをスカウトするから捕まえるって……お父さん興奮して血圧上がって大騒ぎになっちゃった」

「ははは……」

私は渴いた笑いをしてしまう。

一人、そんな危険走行を遣りそうな馬鹿に、心当たりがあったから。

でも、白いインテグラなんてよく見掛けるし、今私の頭に浮かんでいる人物が該当人物かどうかまでは、まだ断言出来ないかも知れないし……

なんだか凄い話をしているのだからうけれど、カーレースに興味が無い私にとっては、何が何だかさっぱりだわ。一応な愛想笑いを浮かべていたら、琴美が少しだけ機嫌を損ねてしまったらしく、軽く私を睨んで来た。

「恵理、この重大なトコロ判ってる？ こう言っちゃ悪いけれど、旧式のインテグラが『あの』ランエボとまともに競り合って勝負し

ていたのよ?」

「そ、そうなの? それって、インテグラのドライバーの腕が凄いつて言いたいのか?」

「そう! そこよ!」

私は軽い眩暈を覚え、血の気がすうすうと引いて行くのを感じてしまった。

「メンバーが追い掛けたんだけど、ぜんぜん追い付けなくて、結局振り切られちゃった。もしかしたら、県外から来た人だったのかもね。で、見失ったって連絡貰ったお父さん、もうがっかりしていたわ。『うちに来てくれれば、もっと良いマシンに乗せて遣れるのに』って」

「……」

まさか……チームメンバーを振り切ったって?

私は更に嫌な予感に襲われた。

ラリーがあつた先週末の金曜日……って、司が次の日の明け方に帰って来た日じゃなかったかしら? しかも自分の車を片目……右フロントのライト部分が壊れていたし、右側面ボディにもかなり凄い傷が付いていた。

司は『自損で事故った』なんて言っただけで惚けていたけれども……琴美の証言と照らし合わせると……益々怪しい。

『走り屋なんかもう卒業しましたよ。俺、いつまでもガキじゃねーから』……壊れた車を前にして、司が走り屋に復帰してしまったのかと疑って心配していた私に、乱暴にそう言っつて不敵に笑った司の言葉を思い出してしまった。

司の言った言葉と、車の半端じゃない破損具合……偶然にしても、重なる部分が大有りだわ。どう見たってまだ卒業なんかしていないじゃないの。

……司の嘔吐き！

しかもあの日は……

私はその日の事を思い出して、思わず顔を赤らめてしまった。

* * *

土曜日に日付が変わってしまっても、司は帰って来なかった。

持っている携帯に連絡を付けようにも、電源を切っているのかそれとも電波が届かない地域に行っているのか、全く連絡が取れないでいた。

司が私と一緒に住む条件の一つに、食事を作ると言っつ約束がある。

その日も先に帰社した司は、約束通り晩御飯……多分、時間が無かったのだと思うけど、親子丼にお揚げが入った豆腐とワカメの味噌汁に、トマトサラダを準備して外出していた。

テーブルには、相変わらずの下手な文字で『今日は遅く帰ります』
って書き置きを残して。

司が戻って来たのは、明け方の四時過ぎだったように思った。

帰って来ない司が気になって、なかなか寝付けずにとうとうとまどろんでいた時に、マンション下の駐車場が俄かに騒がしくなった。

私は急いで起き上がると、自室の窓から駐車場側のベランダへと飛び出す。

辺りがシンとしていて誰もが寝静まっている静けさを破るように低く唸るエンジン音が聞こえている。駐車場の街灯に照らされて闇闇に浮かんだのは、紛れも無く司の白い改造インテグラ。そして、その隣にも数台が駐車場枠にお行儀よく並んでいた。

アイドリングしているそれらの車は、明らかにエンジンを弄っていると判る、低くて太い排気音が聞こえている。

こんな夜中に騒音を撒き散らすだなんて常識を疑うわ。それにここを誰のマンションだと思っているのよ。すぐに出て行って貰わなくっちゃ。

マンションのオーナーであり管理人である私は、彼等に即刻退場して貰おうと踵を返したのだけれど、私の心配を余所に、アイドリ

ングをしたまま停車していた数台の車は、司のインテグラを残してすぐに敷地内から出て行った。

それにしたって……

今頃帰って来るだなんて……幾ら夜遊びが趣味だからと言っても迷惑よ。ここは一言、司にガツンと言っておかなくちゃ。

そう思っ、私はパジャマの上にクリーム色のカーディガンを肩に羽織ると、玄関の所で明かりも点けずに腕組みをして、戻って来る司を待ち伏せていた。

暫くして外から玄関の鍵が開く音がした。

静かにドアが開き、司が寝ているだろう私を起こさないように気遣ってか、十分に開き切っていないドアの隙間からすると身体を忍ばせて、後ろ手で素早くドアに鍵を掛ける。

第6話

部屋に入れてホツとしたのか、それまで息を詰めていたらしい司が、大きな溜息を吐いた。暗がりから非常灯に仄かに照らされた横顔が、心配して苦しくなっていた私の胸の悶えを癒して解き放つてくれる。

それにしても、こんなに遅くまで一体何をしていたのよ？

司の予定に自分で勝手に巻き込まれて、不機嫌かつ寝不足になっていた私は、安心し切って靴を脱いでいる司の真上にあった照明スイッチをいきなりONにした。

「わあっ？」

無防備でリラックスしていた司は、すぐ眼の前にパジャマ姿で仁王立ちになっている私に気付いて、飛び上がるほど驚いたみたい。

「ど、どこに行っていたのよ？」

司が私の予想以上のリアクションで驚いてくれたお陰で、思わず吹きそうになってしまう。でも、今はちゃんと注意して叱っておかないと、また次に同じ事をしでかすに違いないわ。

そう思って、緩みそうになった口元を引き締めると、キッと司を見上げた。

身体を屈めて片足を上げ、靴を脱ぎかけたまま固まってしまった司は、眼を大きく見開いた状態で私の方を見ている。

そしてその頬に、べったりと赤いインクみたいなものが……

「あ……なにその赤いの……？」

「えっ？」

私の言葉に司は慌てて、手の甲を遣って顎の辺りをゴシゴシと擦った。

本来玄関先の照明は、昼間のような明るさを必要としない。けど私は司の右顎の辺りに赤ものが付いているのを発見して、胸が締め付けられるような不快感を直感的に味わった。

拭った手の甲に残された赤い色が移り、それを見て司は一瞬だけ驚いたみたい。

「なんだ。さっきの口紅か……焦らさないてくださいよ。何処かで怪我したのかと思ったじゃないっすか」

平然としてそれが『口紅』だと言いつつ司の態度に、今度は私が固まる番だった。

今まで心配して眠れなかった自分が馬鹿みたい。

損をしたような気がして、俄かに悔しくなって来る。

司の女癖の悪さは水守り^{みも}んの調査報告で知っていた。

私の部署に配属が決まるよりも先に、木村に採用する事自体が間違っているのだと水守りんが心配していたし、上役連中も懸念して噂されていた事だ。

でも、私は一通りの護身術を心得ていたし、司が他の誰と付き合いおうと私に迷惑を掛けないのであれば、それは司の自由なのだからと割り切っていた心算。

なのに……

誤魔化す処か、この私の目の前で……面と向かって『口紅だ』……
…だなんてハッキリと言うの？

しかもこの状態で私の目の前に現れても、ちっとも悪びれないと言うか、開き直っていると言うか……その度胸は一体何処から湧いて出て来るものなのよ？

こっちは流石に落ち込んでしまっわ。

「…っただ…ただいま……」

俄かに曇った私の表情を見た司は、焦りの色を隠せないまま取り敢えずの挨拶を遣した。

「『ただいま』じゃ無いでしょうか？ 今、何時だと思っているのよ！」

「三時半」

「時間を聞いているのじゃないわ」

「『何時だと思っている』のかつて、課長言ったじゃないっすか。今」

いつもと違う低い声で静かに言い返す。表情からは読み取れないけれど、少しだけ司がイラ立っているのが判る。

「そ、そうじゃなくって、わ、私は司の常識を訊いているのよ。女の人と一緒になら、朝までそうしていればいいじゃない！ こっちは夜中に起こされて迷惑だわ」

「へええ……」

私からの苦情を聞いた途端、司は肝を据えて開き直ったのか、急に不敵な態度を取った。

司は靴を脱ぐなり私にずんずん近付いて来て、気圧されて後退させた私は壁際に追い詰められてしまった。それでも司は歩みを止めず、全身を密着させて来た。

「やつ……な、なによ？」

「ごっごつした司の身体。一通りの護身術を弁^{わか}まえてはいるけれど、男の人にこんなにぴったりと身体を密着されてしまったのは、これが初めての事だった。

むさ苦しい程の威圧感に私は戸惑う。

「課長、もしかして俺の事を心配して、起きていてくれたんすか？」

「ま、待つてなんかいないわよ。でも、し、心配くらいするでしよう？ 帰りが遅いつて書き置き残していても遅過ぎるわ……そっ、それよりも、くっ付かないでよっ！」

「ゼロ距離での護身術なんてありましたっけ？」

「な、何の事？ っは……離れてよー！」

私は惚けて答えた。もちろんこんな状況から逃げ出せる術^{すべ}くらい心得ている。だけどそれを遣つてしまうと、今度は司の心が私から離れて行つてしまいそうな気がして……そして、いつでも逃げ出せるのだからと言つ奢つた安心感のお陰で、今は司がどう出るのかを知りたい欲望に取り憑かれてしまったの。

「あん！」

司は私の顎に手を掛けると、強制的に顔を上げさせる。

「綺麗だ……」

「な、なにが？」

吐息が直接掛りそうなくらい顔を近付けられてしまい、私は思わず息を飲み怯んだ。

「課長の口紅……ピンク色で旨そう……」

「く、口紅？ メイクなんてしてやしないわ」

就寝中にお化粧なんかしたら、お肌が荒れてしまっしょ？ その辺りの事は、この私よりも司の方が詳しいのじゃないかしら？

「ちょっとだけ……盗っちゃっても……いい？」

第7話

「な……なにを……？」

司の言葉に、どきんと心臓が大きく跳ねる。

一体、何を司は言っているの？

司が酔っているのかとも思ったけれど、本人からはアルコールの臭いなんてしてやしない。微かにガソリンと煙る様な排ガスの臭いがしているだけ。

司の言葉に気が動転して取り乱してしまったあたしは、顎を上げていた手で両頬を掴まれて、口が閉じられなくなってしまった。

「んふう……」

司の顔がぐつと近づいたかと思ったら、身構える間も与えられずに抱き締められ、唇を奪われた。私よりも少し硬くて確りとした弾力が感じられ、熱く火照った舌が私の舌を絡めて弄ぶ。

気持ちいいと思った次の瞬間、膝から力が抜けてしまい、一人で立っては居られなくなってしまった。

司はそんな私を心得ていたように、しっかりと私を支えて抱き締める。

流石は『女つたらし』を誇るだけはあるわ。キスだけで、魂を抜き盗られて行くような……そんな気がしてしまうんだもの。

「課長、気持ち良くなった？」

徐おもていに私から唇を離すと、茹で上がってしまった私の顔を覗き込んだ司は、悪戯いたづらつ子みたいに余裕の表情で私を見詰める。

「や、やだ……わ、判らないわよ……そ、そんなの……」

「あれ？ 今の課長、『良かった』って顔していますよ？」

「……」

凶星だった私は恥ずかしくなって、上気した頬を更に赤らめる。

司は私を抱き締めたまま、くすくすと声を押し殺して肩で笑った。

「そ、そんなこと、な、ないわよ……き！ きゃ？」

微かに湧き上がった反抗心に任せて、私は可愛げも無くそう言い放つ。

途端に司は真顔になって、身体を深く折り曲げたかと思ったら、左腕で私の両膝を後ろから勢いよく掬い上げると、私の身体を軽々と持ち上げた。

肩に羽織っていた私のカーディガンが、するりと肩を伝って力無く床に落ちる。

「課長、素直じゃないっスね？ それともお嬢様は『火遊び』がしたくなりました？」

「誰がよっ？ い、嫌っ！ お、降ろして……降ろしなさいってばあ！」

真顔の司が急に怖くなり、委縮してしまった私には、既に司を抑止させるだけの力など持ち合わせては居なかった。

お姫様抱っこをされたまま、私は司の部屋に連れて行かれて、やや乱暴にベッドの上へと降ろされる。

「な、なにをするのよ！」

「決まってるでしょ？ こうすんの」

「きゃあああ！」

仰向けに引つ繰り返された私へ、司は躊躇せずに押し掛かって来た。素早く両手首を掴まれて、シーツに縫い止めるように押さえ付けられる。

「下手に俺を挑発しないでくれませんか？ 俺、マジで遣っちゃいますよ？」

耳元でそつと囁かれ、直後に耳朶を甘噛みされて、私の身体がビクンと跳ねる。噛まれているはずなのに、痛いとは少しも思わなかった。それどころか、体中が熱くなり、もう何も考えられなくなってしまう。

「ああん……」

自分でも驚くくらい、甘えるような声が漏れた。

「課長が悪いんだ……俺を挑発したりするから……」

「わ、私はそんなっ……あ、ああっ……」

キスされる度に身体が敏感に反応して、勝手に身体が弾んだ。唇を奪われる間中、ずっと息を詰めてしまうから、呼吸が思うように出来なくて肩で荒い息を吐く。

司は面白がっているのか、クスクス笑いながら私のパジャマのボタンを一つ、二つ……じっくりと愉しんでいるように……焦らせるようにしながら、ゆっくりと外して行く。

「厭あつ！」

大きく胸元を肌蹴られ、素肌の背中に廻った司の片手がブラのホックを簡単に外した途端、私は急に怖くなった。

帰って来た司はなんとなく寂しそうだった。

あの溜め息は、何かを忘れて振っ切ろうとしていたからなの？
それなのに、待ち伏せされていた私から叱られて、怒ってしまったのかしら……？

だとすれば、私はその『気』を紛らわせる為に……？

羽衣を強引に剥ぎ取られてしまい、野獣の生贄にされてしまうよ
うな……そんな気がして切なくなる。

必死になつて司の腕から逃げ出そうと暴れるけれど、反抗しようにも押し掛かり押さえ付けられてしまった私には、もう逃げ出せるチャンスなんて無い。

なんて凄い力なの？

護身術を弁えていると言う私の奢った安堵感が、粉々に砕けてしまふ。

「遊びの心算ならもう止めて！ 私は司みたいに、器用に遊びで關係を持つ事なんて出来ないんだからあ！」

司の腕の中で力尽き、涙交じりに訴えた私の言葉に、司の動きがぴたりと止まった。

「……ない」

俯いた司の口が微かに動いて、何かを否定した。

よく聞き取れなかったけれど、その否定は何を言おうとしていたの？

第8話

ひきつけを起こしたように何度もしゃくり上げながら、私は押し掛かっている司を濡れた瞳で訝って見上げた。

視線が合った司は、いつものように穏やかな眼に戻っている。

「課長、綺麗だ……」

「は、はぐらかさないで」

「俺は十分真面目ですよ？」

ふわりと笑った司は、目尻からポロリと零れた私の涙を、そつと指先で拭い取った。

司の顔が近付いて来る

きつく張り詰めて切れそうになっていた私の心の糸が、不意に緩んだ。

さつきは怖くて堪らなかつたけれども、今の穏やかな司になら、肌を赦してもいいわと思った。

何度も何度も司からキスだけで昂たかぶらされてしまい、昇り詰めてしまった私は、深い眠りに堕ちて行くように意識が遠くなって行く。

そんなぁ……私のせっかくのロスト・バージンが、意識不明のままで終わっちゃうだなんて……

* *

「くちゅんっ！ ……寒っ……………」

肌寒さで眼が覚めると、私は上半身を大きく肌蹴た半裸状態のまま、司のベッドで眠っていた。勿論、隣にはまだ司が軽い寝息を立てて熟睡している。

でも、司は帰って来た時の上下スウェットを着ていたまま。

私は乱された自分の姿が俄かに恥ずかしくなってしまう、両手でささっと胸を隠し、急いで外されたブラと、脱がされたパジャマのボタンを留めて、自分の身体をチエックする。

「ん？」

……………なんとも……………ない？

初めてセックスをした友達の話からは、終わった後もお腹に異物感が残っていて、暫くの間痛かったって聞いた事があったのに、私の身体には処にも痛む所は無い。強いて言えば、キスの痕が残っているのと、抵抗した時の筋肉痛くらいだわ。

もしかしたら、司はあのまま私の処女を取っておいてくれたのかしら？

学生の時の司は、とにかく女癖が悪くて、何かと要注意の人物だ

っ
たらしいけれど……まさか……ね？

私はまだぐっすりと眠っている司の寝顔を眺めた。

司が気にしている『童顔』は、私にとっては守備範囲。眠っている時の寝顔が一番可愛いわよ？ 無精髭が無ければ、もっと可愛いのに……ね。

普段は誰よりも穏やかで優しい眼をしているのに、機嫌が悪い時に時折見せる鋭い眼光は、流石に元走り屋だっただけあって威圧感
はパンパじゃ無い。この有段者の私でさえ射竦められてしまったもの。

だけど、そんな眼は私には見せた事が無かったのに、どうして？

司は私が『まだ』だと知っているし、キスだって本当は……司と
が初めてだったんだもの。遊び慣れている司には、私が相手じゃ役
不足だったと言う事なのかしら？

それとも大切な時の為に、取っておいてくれたのかなあ？

そんなことをあれこれ思い廻らせていて、なぜだかふと違和感を
感じ、私の視線が司の下半身に及んでしまった。

「……？」

あれは……なに？

仰向けに眠っている司の身体が何か変だわ。淡いグレーの下スウ
エットが、不自然にもこつと隆起している。

私は興味津々で、こっそりと眠っている司のウエストゴムに手を掛けて……

「きつ？ きゃあああ！」

「え？ な、なに？ ……う？ うわあ？」

私の悲鳴に驚いた司が、寝呆けながら眼を醒ました拍子に、ベッドから転げ落ちた。

* * *

今思い出しても恥ずかしくなるわ。なんで……なんで『あんなモノ』覗いちゃったのかしら……って。

「恵理？ 恵理い？」

琴美の呼ぶ声に、私はハツとして思わず手にしていたトレーを落とすようになった。

「っあ？ あ、な、なに？」

「もう、赤い顔して何を思い出しているのよ？ 聞いていなかったの？」

「あゝ、しめ〜ん」

いや……『思い出し笑い』だなんて、恥ずかしいからそんな事言わないですよ。

肩を竦めると、自分の話を聞いていなかった私を怒っているであろう琴美の顔を、申し訳なさそうに見上げてしまった。

「だからあく、恵理の部署に居る『日高』って言う新卒が、もしかしたら『峠の日高』って呼ばれていた走り屋じゃないの？　って聞いているの」

「……」

これには流石に即答を迷ってしまった。

だって、司が本当に『峠の日高』って呼ばれていた走り屋本人だったから。

肯定すれば、スカウトの連中を振り切った司の努力は無になってしまうだろうし、かと言って無下に否定するのも私としては釈然としない。

「ね？　『峠の彼』の事を、何か知っているの？」

「え？　え、ええ？　誰それ。知らないわよ？」

琴美は期待を籠めた眼差しで、私をじっと見詰めて来る。

だ、ダメよう……そんな風にじっと見詰めないで欲しいわ。だって、琴美の眼を見ていると、つい本当の事を喋ってしまいそうにな

るんだもの。

困ったわ……そう思った時だった。

「ああ、ここに居たんだ」

司の暢気な声を聞き、私はびっくりして心臓が飛び上がりそうになった。

第9話

「ひ、日高……さん？ な、なんのご用かしら？」

司の名前に琴美が敏感に反応した。

「彼が日高さんなのお？ 紹介して貰おうと思っていたのに、手間が省けたってカンジだわ」

「……」

ど、どうしてこんな時に現れたりするのよっ！ 琴美はアンタの事を怪しいと睨んでいるのに……

会わせたくない本人がこのこと遣って来るだなんて……自分から畏に入って行くようなものじゃないの。

挙動不審に陥ってしまった私とは全く違い、何も知らない司は琴美に向かって『初めまして』と爽やかに挨拶を交わした。

「あ、おう、突然不躰な質問で申し訳無いのだけど、日高さんって週末にミカワで開催されたラリーに行かれませんでしたか？」

「はあ……確かに不躰な質問ですよね？」

質問内容を聞いた司は、少し困って苦笑いをする。

「『峠の日高』って言われた事、ありません？」

「！」

私の髪が猫の毛のように逆立った気がした。

『不躰ついで』とは言っても、それは余りにも唐突だわ。

意味深な流し眼を司に送った琴美は、瞳をキラキラさせて司の返事を待っている。

「はあ、僕が……ですか？」

「ええ」

「さあ？」

司は余裕で微笑み、事実をさらりと否定した。

いつもなら、平気でその場を誤魔化した嘘を吐く司を指摘して非難する私だったけれども、この場合は例外だわ。司の答えに、先ずはホッと胸を撫で下ろす。

「あの、車は持たれていますか？」

「ええ、一応は」

「車種は何に乗ってます？」

惚ける司に業を煮やしたのか、琴美は司の車種を聞いて来た。

ああ……司は、琴美がレーシングチームのスポンサーの娘だって

事、知らない筈だわ。

「そんなコト聞いてどうするんです？ 白の……」

「白の？」

「あ、ああー」

「？ どうしたの恵理？」

「ゴメン、私、社員証何処かに遣っちゃったみたいなの。あれが無いとランチの支払いが出来ないわ」

「いいわよ恵理、今日くらい貸してあげるから」

言い掛けた司のセリフを遮るように、あたしは声を張り上げた。ついでに琴美が司の事を忘れてくれれば良いのにと都合の良い事を考えたのだけど、残念ながら今の琴美には、私の牽制も功を為さなかったみたいだわ。

傍に居ながら、司達の会話を聞いていない振りをしていた私は、急に身体が熱くなって、今にも嫌な汗が吹き出しそう。

ああ駄目。今度こそばれてしまいそう。

じゃ、喋っちゃダメよう！

何も知らない司が自分の車種 インテグラだと言った時点で、司は琴美のお父さん率いるスポンサーのレーシングチームに拉致されてしまいそうな雰囲気なんだもの。

ううん、拉致されなくても、走り屋を完全卒業出来ていない司だもの。レースが出来ると聞けば、きっと司は喜んでチームに参加してしまうかも知れないわ。

そうなってしまったら、正社員の二次収入であるアルバイトは厳禁。私の部署での始末書どころか、木村の正社員を辞めなければならぬのに……

私はハラハラして冷や汗を掻きながら、司が何とかこの修羅場を上手く凌いでくれる事をひたすら祈った。

「白のフィットですけど？」

「え？」

その答えに驚いて、私は司を振り返った。

確かに、週末の『事故申請』で壊れたインテグラは司の馴染みである修理工場に『入院』していて、今は私のフィットに乗っているけれど……琴美の質問には、普通なら自分の車の車種を答えるものじゃないの？ そもそもフィットは私のだから。

「聞いて驚くような車種じゃないでしょ？」

「え、ええ……そ、そうね……ごめんなさいね？ どうも、人違いだったみたいだわ」

期待を裏切られてしまった琴美は、凄く残念そうに沈んだ声でそう言った。

私は、司の見事な惚けっぷりに感心するやら、自分の車を馬鹿にされたような気になって不機嫌になるやら……

『聞いて驚くような車種』……じゃなくて悪かったわねっ！

少しだけ頬を膨らませてくれた私は、司と眼が合ってしまった。

『アレ？ 怒っちゃいました？』って笑って言いたそうな顔をしている司を見て、更に不機嫌になる私。

「ね？ それよか、コレ……さっき、保険会社のおばちゃんに貰ったんですけど、丁度二人居るから……どっちがいいですか？」

私たち二人の眼の前に、司は白い棒付きの包装されたキャンディー二本を見せて来た。見た目の色で、それがオレンジ味と苺味だと判る。

私は視線で苺味の紅いキャンディーを指定したのだけれど……

「あ、私は紅いの〜」

司は私が紅い方を選んでいたので承知していたけれども、言葉には出して言わなかったから、この場合琴美に優先権が与えられても仕方が無いわ。

トレーを持っていて両手が塞がってしまった私はこれからランチだし、せっかくだけけれど、司が持って来たキャンディーを受け取る心算は無かったもの。

……って言うか、年下の司から子供っぽく扱われたみたいで、何だか恥ずかしいわ。

司は持っていた紅いキャンディーを琴美に渡すと、オレンジの包装を破って私の方に差し出した。

「課長。はい、あーんして？」

「っえええ？」

だっ……誰がこんな所で『あ〜ん』なんか出来るのよっ？

仮にもここは社内の食堂。事務所だけでなく、工場からも、他部署の上司も来ているのよ？

司の予想外の行動に、私は顔から火が出そうなくらい焦った。

しかもこの状態は……こっ、これって『餌付け』じゃないのよ？ どうせなら、琴美に二本ともあげてしまえば良いじゃない。

第10話

小さくイヤイヤと首を振り、視線で司に抗議したけれど司はそんな私の反応を心得ていたみたいで、悪戯っ子みたいにニヤリと笑った。

「なに恥ずかしかつてンです？ 課長の場合、両手が塞がっているから仕方ないじゃないですか」

「で、でもお……」

「あー、いくな」

周囲の視線を気にした私は、恥ずかしくなってもじもじしているのに、一緒に居た琴美は素早く反応して羨ましがった。

「あー、じゃあ良かったらそっちと交換しますか？」

「うんー！」

琴美は貰った紅いキャンディーを返すと、代わって司が手にしていたオレンジのキャンディーをぱくりと啜えた。

琴美……貴方、司から『餌付け』されているの……判ってる？

私の『退き』の視線を気にせずに、司から構って貰ったと思っているのか、琴美は凄く嬉しそう。

「課長の分は、ここに載せておきますね？」

「え？ え、ええ……ありがとう」

司は琴美から交換奪取した紅いキャンディーを、私の持っていたトレーの上に載せた。

「じゃあ、僕はこれで失礼します」

「え……ええ」

「おいひいゝ、ひらかひゃん、ありあとー」

司は誰にも気付かれないように素早く私にウインクを遣すと、司のサービスに感激した琴美にもニッコリと愛想笑いを浮かべてその場を立ち去った。

私はランチを載せているトレーを両手で持ったまま、その場に立ち尽くしてしまった。

意識している心算は無いのだけれど、自然と頬が熱くなる。

い、今の……今のは確かに司が計算したこと……なの？ 私に紅い方を渡そうとして、ワザとあんな事をして琴美の気を惹いて……？

* * *

「ね？ 彼がああ『峠の日高』って呼ばれている本人に見えた？」

私は琴美とランチを摂りながら、さり気無く予防線を張っておくことにした。さっきの司からは、とても走り屋だと断定出来る要因は見い出せ無かった筈だもの。

「ん〜、そうなのよねー。でもさ、私の知っているドライバーの人も、普段はおっとりとして居て、全く『それ』らしい所を見せない人が多いのよねー」

「ハンドル握ると性格が変わるとか？」

「うん、そう。それに、この辺りで『日高』の姓は地元には無いしね。今でも彼は限りなく黒に近いグレーだわ」

コーンスープをスプーンで上品に飲みながら、琴美はまだ司が『シロ』だとは判断出来ないと言い切った。

「ところでさあ、今の彼って中途採用じゃなくて新卒よね？」

「ええ」

「あー、じゃあ、私とは三歳年下なのね〜」

「それがどうしたの？」

意味深な琴美の言葉に何か引掛ってしまう私。琴美とは同期で同い年だから、三歳空き……は、私にも当て嵌まる。

「だけど、やっぱり三歳年下の彼って『ナシ』なのかしら……？」

司は私との付き合いを遊びくらいにしか思っていてくれないのか

な……そう不安に思っていたら、琴美から意外な提案が……

「今の彼が恵理の部署に居る彼で間違い無いよね？」

「それがなにか？」

「彼……私に紹介してくれないかしら？」

「ぐ？ ……けほ、けほ、けほ……」

とんでもない頼まれ事に、私は飲んでいたお茶に咽^{むせ}て咳込んでしまった。

一体何を言い出すかと思ったら……

でも、流石はスカウト経験者。狙いは正確だし、なかなか見る目を持っているわ。だって、琴美が覚えていた車種と、アマとは言えレーズ慣れしていた連中を振り切って逃走したと言っていた状況……これはもう、どう考えても司しか居ないでしょう？

単純に嬉しいと思うべきか、困ったヤツねと思うべきか……微妙だわ。

「ね？ どう？？」

「げほっ……あ、あのね……私は『彼氏』の斡旋は遣っていないわ。それなら私の方がお世話して貰いたいくらいよ。第一、プライベートルな事まで、上司だからって関知するような事じゃないでしょう？ なんなら今度は琴美が直接話し掛けてみれば良いじゃないの？ もう初対面じゃないでしょう」

「直接話し掛ける勇氣を持っているのなら、もうとつくに遣ってるわよ。彼、さつきは凄く優しそうだったけど、案外そう言う人に限って、スケベでだらし無くて性格キツイって噂で聞くもの」

「紹介してって言う割には……なんだか物凄い言い様ね？」

『スケベ』って所だけしつかりと言い当てられちゃっているけれど……少なくとも私よりも生活はだらしなくは無いし、性格も普段は結構優しくて良い人よ？

私の放置対応に、琴美は頬を大袈裟に膨らませて拗ねた。その琴美の視線が、私のトレーに置いてあった、さつきのキャンディーに注がれる。

「あれ？ 恵理はまだ食べないの？」

「うん？ ああコレ？ 今はお腹一杯だから、午後のデザートに取っておくわ」

トレーの隅っこに司が置いて行った、棒付きキャンディー。自分で食べれば良いものを、わざわざ私の所にまで持って来てくれたのね。

私はそつと棒の部分を摘んで手に取ると、クルクルと指先を遣って回転させてみた。

光に透かされると、鮮やかに赤く反射するキャンディー。じつと見詰めていると、子供の頃によく食べていた懐かしい頃の思い出が蘇って来そうな気がする。

たった一本のキャンディーなのに、何だか食べちゃうのが勿体無く思えて来てしまった。

最終話

その日の晩、私は司の作ったオムレツを突きながら、金曜の夜の事を伏せたまま琴美について触れてみた。

「ああ、食堂で俺が飴あげた人でしょ？ 畑田電子の娘」

「知っていたの？」

「レーシングチーム作っているじゃないっすか。それくらい常識として知ってますって」

「司が眼を付けられた理由、もう判ってる？」

「そりゃあ……!!」

言い掛けた司が慌てて口を閉ざしたけれど、もう遅いわ。やっぱりレースがあつた後で激しいバトルを遣っていたのは司だったのね。

「いいわよもう……ばれちゃっているし、今更とやかく私が言う事じゃないから」

私から大目に見られたと言うのに、司は何だか納得出来ていないみたいだった。子供みたいに口を尖らせてムツとなって拗ねている。

自分で嘘をばらしてしまったのが、そんなに気に入らなかつたのかしら？

私はお気に入りの油揚げが入つたお味噌汁をテーブルにことりと

置いて、クスクス笑った。

「……なんか俺、課長の掌で上手く転がされて遊ばれているみたいな気がする」

「あああ、そんな心算は無いのだけど？」

「そんな心算も、こんな心算も無いです」

「隠し事が下手なのは前々から知っていたけど、こつも判り易いとは思っていなかったわ。司、私の事を安心し切っているのでしょうか？」

「べつ、別に……」

言い当てられて戸惑った司の視線が、所在なく宙を彷徨う。

「でも、私は嬉しいのだけれど……？」

「それ、ホント？」

テーブルの向い側で、食後のコーヒーを飲んでいた司がカップの残りを一気に飲み干すと、床に立て膝状態になって、私の傍に猫か犬みたいにするんと寄り添って来た。

私の心臓がちよつとだけドキリとする。

この前の続きを期待してしまい、恥ずかしくなって赤くなったままコクンと頷いて見せた。

「課長？ 俺さ、デザートをまだ残しているんですよ」

「え？ 『デザート』って……なに？」

耳元で熱い吐息を吹き掛けながら、そっと司が囁いた。

今にも司の唇が、私の耳朶みみたぶに触れてしまいそうで、私の心臓がドキドキと早く脈打ち始める。

これって、司に迫られているのかしら……？ だったらさっき司が口にした『デザート』って、もしかしなくても私の事なの？

頭の中で、大きなお皿の上に浴衣姿の自分が横座りになっているイメージが浮かんで来た。妄想しただけなのに、全身が熱くなって火照ほてって来る。

「き、今日は暑いわね？」

「ふふっ、ナニ誤魔化してんスか？」

咄嗟に雰囲気壊してしまおうと、私の情緒の無いセリフが口を突いたのに、司は私の思考を読んだのか、とつくに心得ていたみたい。冷静に斬り捨てられ、笑われてしまった。

や、ヤダ恥ずかしい。し、静まれ私の心臓っ！ 司に聞こえちゃうじゃないのよ……って、もう眼の前に司の顔のアップが……

「あ……ね、ねえ『デザート』ってさきの意味なんだけど……」

「それは……」

私の決心が着かないまま、司が私に触れる直前に、リビングに置いてあった電話が鳴った。

司は軽く舌打ちをして、良い感じになったと思っていたらしい雰囲気や、困気を壊してくれた電話に、不機嫌になりながら受話器を乱暴に取り上げた。

「はい？ もしも……」

「え〜！ 恵理の家でしょここ？ って言うか、アンタ誰っ？」

受話器から聞こえて来た声に、私は全身の毛が逆立つほど驚いてしまった。だって、その声は琴美の声だったんだもの。

いつもなら、直接私の携帯に連絡して来るのに、今日に限ってどうして自宅に掛けて来たりするのよお？

司は困った顔をして眉を顰め、受話器を私に向かっておすおすと差し出した。

「課長……マズイ……ばれたかも……」

「ちょっとおお！ 今電話に出たオトコ！ もう一遍出て来なさいよ！ くらあ〜！」

私は司から受話器を受け取らず、先に受話器の切断ボタンを指先で押さえて通話を強制的に終わらせた。

拗ねた琴美の声がまだ耳に残っている。そして言葉の端々に彼女

が羨ましそうだった気配を感じ取り、ほんの少しだけ罪悪感を覚えてしまう。

私が自宅で男の人と居る事がばれちゃったけれど、まさかその相手がお昼のランチの時に、餡を貰って『餌付けされた』司だとは気付いてはいない筈……そう思うと、ちよつとだけ私の悪戯心が擦くすぐられてしまった。

「切っちゃって大丈夫ですか？ 課長の友達でしょ？」

司は『良いのかそれで』と言うけれど、そこは琴美が間違い電話を掛けてたって事で……だって今更琴美に何て言えば良いのよ？ ここはもう惚とぼけちゃうしか無いじゃない？

「今どき番号表示でしょ？ つーか、リダイヤルされたら終わりですよ？」

「電話口に出られないくらい手が離せなかったのだとしたら？」

私の提案を聞いた司が、心得たかのようにフーンと鼻を鳴らして相槌を打った。

「へえー、じゃあさ、どんな時に『手が離せられない』か教えてくれないっすか？」

再び立て膝になり、司は座っている私の腰に腕を廻してくすくす笑う。司の吐息が首筋に掛って擦くすぐりたい。

「そつね、こんな時……かしら？」

私は徐おもむろに司の方へ向き直ると、そつと顔を近付ける

そのオトコ

要注意っ！

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8126m/>

そのオトコ 要注意っ！（オフィスでニアミス）

2010年11月2日05時31分発行